

# 中国人日本語学習者による「が」「けど」の使用に関する考察

## —日本語母語話者との比較を通して—

こ そこう  
胡 蘇紅 名古屋大学

本研究では、中国人日本語学習者はどのように「が」「けど」を使用しているのかを、日本語母語話者と比較し、全体の使用数、文末での出現数、意味用法、「のだ」との共起の側面から明らかにすることを目的とする。今回の結果に基づいて、日本語学習者に日本語を教える時に、「が」「けど」の終助詞的用法、「のだ」が付加されている時の意味用法を導入することを提案する。

### 1. はじめに

「が」と「けど」には(1.1)(1.2)(1.3)のように、「逆接」の用法、「前置き」の用法、「終助詞的用法」がある(中俣 2014: 38)。これまで、陳(1993)のように、「が」「けど」についての日中両言語の対照研究が数多く行なわれているが、学習者による「が」「けど」の使用実態を対象とした研究はまだ少ない。本研究では、『日中Skype会話コーパス』を用い、中国人日本語学習者は接触場面で、どのように「が」「けど」を使用しているのかを、日本語母語話者と比較し、全体の使用数、文末での出現数、意味用法、「のだ」との共起の側面から明らかにすることを目的とする。

- (1.1) 実は日本語の勉強は、<うん>私が、えー最初思っていたより難しくないが、それほど簡単じゃありません。(『逆接』の用法)(『日中 Skype 会話コーパス』)
- (1.2) さっきなんですけど、私の場合は、あの、大学が終わったら、あの<はい>、取りあえず夕飯の買い物に行きます。夕飯。(『前置き』の用法)(『同上』)
- (1.3) あんまり種類、よく分からないんですけど。(『終助詞的用法』)(『同上』)

### 2. 「が」「けど」の使用状況

本研究では、「が」「けど」の使用状況を分析した結果、中国人日本語学習者と日本語母語話者の間に大きな差があることが分かった。まず、表1が示すように、中国人日本語学習者は「が」を多く使っているのに対して、日本語母語話者は「けど」を多く使っている(下線部)。

表1 全体使用数の比較

	中国人	日本人	合計
が	<u>32 (59%)</u>	22 (41%)	54 (100%)
けど	74 (16%)	<u>389 (84%)</u>	463 (100%)

次に、文末における「が」「けど」の出現数について、中国人日本語学習者より、日本語母語話者のほうは「が」「けど」を文末で多く使っている。

また、中国人日本語学習者は「が」の「逆接」「前置き」の用法を多用しているのに対して、日本語母語話者は「が」の「前置き」の用法を多用している。「けど」を使うときに、中国人日本語学習者と日本語母語話者両方とも「けど」の「前置き」の用法を多用している。

さらに、表2が示すように、中国人日本語学習者は「が」と「けど」の「前置き」の用法を使

う際に、「のだ」が前接していない形を多用している（下線部）。それに対して、日本語母語話者は「のだ」が前接している形を多用している（波線部）。

表2 「のだ」との共起状況

	中国人		日本人	
	が	けど	が	けど
-のだ	<u>5 (83%)</u>	<u>14 (70%)</u>	3 (33%)	31 (16%)
+のだ	1 (17%)	6 (30%)	<u>6 (67%)</u>	<u>169 (84%)</u>

（「-のだ」が前接していない；「+のだ」が前接している）

### 3. 考察

接触場面における「が」「けど」の使用について、中国人日本語学習者と日本語母語話者の間に大きな差があることの原因には二つがあると考えられる。一つは母語の影響である。接続助詞である「が」「けど」の両方が中国語では「但是類」に相当する（黄 1990）。しかし、「但是類」は逆接的な意味を持つ複文を接続する表現として、「けど」「が」の「逆接」の用法とは対応しやすいが、「前置き」「終助詞的用法」とは対応しにくい（陳 1993）。そのため、中国語人日本語学習者の会話に終助詞的用法として使われている「が」「けど」の用例が少ない。もう一つは日本語教科書における「が」「けど」の説明の影響と考えられる。中国で出版されている日本語教科書である『新版中日交流標準日本語初級上、下』（人民教育出版社・光村図書出版株式会社編 2005）における接続助詞である「が」「けど」の導入状況を見てみると、『初級上』の第16課で、まず「が」の「逆接」の用法を導入され、第24課で「が」の「前置き」の用法が導入されている。「けど」の「逆接」の用法と「前置き」の用法両方とも第22課で導入されている。「けど」より「が」の導入が早いので、中国人日本語学習者は「けど」より「が」のほうを多用する。また、「のだ」の「説明」の用法は第24課で導入されているが、「のだ」と「が」「けど」が共起する際にどのような機能を持っているのかには触れられていない。そのため、中国人日本語学習者は「のだ」が前接していない「が」「けど」を多用する傾向があるものと考えられる。

### 4. おわりに

本研究では、中国人日本語学習者の会話における「が」「けど」の使用状況を日本語母語話者と比較し、全体使用数などに大きな差がある原因を母語の影響および教科書における「が」「けど」の説明の影響から考察した。今回の結果に基づいて、日本語教科書に「が」「けど」の終助詞的用法、「のだ」が付加されている時の意味用法を導入することを提案する。

### 参考文献

黄成穩 (1990) 『複句』 北京：人民教育出版社。

陳美玲 (1993) 「日本語の『けど』『が』と中国語の"但是"系の比較研究：翻訳小説を例として」  
『言語文化と日本語教育』6 お茶の水女子大学日本言語文化学会: 47-58.

中俣尚己 (2014) 『文法コロケーションハンドブック：日本語教育のための』 東京：くろしお出版。